

合わせ、説明のしようもなく、本当に恐ろしい目に合いました。

二度三度もソ連兵に入られ、危険を感じた私（二十四歳）と妹（十九歳）は丸坊主に髪を刈り、ロイド眼鏡をかけて男装しました。彼らは、畳を上げて、床下まで調べました。生きた心地がしません。雨期が終わっていいよ北安脱出が決まってからは、父は満人によくしていましたので、つきつぎに日本札をおせん別に持ってきて、お名残りを惜しんで送ってくれました。

貨物列車に乗り、何日かかったやら、奉天の満鉄の社宅に集結しました。六畳一間に私も親子五人と中野家三人と八人、七か月間寝起きました。父は、大工として皇屯駅につとめ、何がしかのお給料をもらってきました。私と母と妹は満人に雇われて、露天商の店で働きました。避難民は早く帰宅できるということで顔に鍋スミをぬり、きたない服を着て、引揚げ船に乗る、錦州のコロ島に向けて、奉天を出るとき、一つしかないリュックを奪われてしまいました。まったく人生波乱万丈でした。

昭和二十一年六月二十二日、舞鶴上陸。全身DDTをあげせられ、プールのようなお風呂に入れられました。

主人（軍人。十八年一月に結婚。七月二十日戦死）の実家に私も親子五人こがりこみました。

二十一年十二月二十一日、南海大地震に見まれ、津波で家ごと流され、父と妹は九死に一生を得て助けられました。母はついに死体もあがらず、行方不明になってしまいました。葬式も出せず、死後二十三年目に始めて法要供養しました。二十一年十一月に再婚。「塩タキ」などして、電気もなく、ランプの海岸の塩タキ小屋で暮らしました。ほんとうに敗戦の悲惨さは引揚げ者でなければわからないと思います。

さつまいもの弁当

高知県 田辺 昌亮

終戦二年目の春だったように思います。やっとの思いで、母を頭に姉二人、そして私と弟、二人の妹計七人

引揚げ船「たかご丸」に乗船することができましたが、父は開業医のために、ソ連軍に監視され、帰ることができず、姉二人と父とをのこし、日本へ帰国ということになりました。

私ども田辺家としての帰る家はないのです。祖父の代に、日本を引き払い大連へ行ったからです。祖父は、大連の第一回目の医師会長をやっていたとのことです。ですので、母方の郷里、高知県香美郡夜須町坪井というところへ帰りつきました。母方の夜須の家には、母の兄弟の家族二所帯八人が住んでいました。伯父の家も、祖父が村長をやっていた地主でしたが、不在地主で全部取りあげられていたために、食べることにたいへんでした。お金はなく、また売食いする物もなく、母や姉、伯父伯母もたいへんな思いで私ども、子どものために一生懸命でした。やっと夜須の小学校へ通学したある日のことでした。担任の先生に呼ばれて、教員室に行くと、先生が、「君達兄弟はなせみんなといっしょにお昼の食事を教室でしないのか」といわれて、弟が大声で泣き出しました。私も泣き声で先生に「僕たち兄弟はお弁当は持ってきて

いません。いつも、さつまいも二つだけです。他のみんなみたいに弁当を持ってきていないので、みんなお百姓さんの子ども達だからお弁当を持ってきているが、私たち兄弟は、それがなかったために教室で、みんなと共に食べられないのです。」と言ったのでした。いつも運動場の木の下で弟と二人で食べていたのです。

さて、父が帰ってきたのが、たしか九か月くらいあとになってだと思えます。父も女、子ども達を先に帰して心配で逃げ帰り、そのときの心苦がもとで体をこわしていました。そのためか、お金のためか、開業もせず、加茂村という村の村医として働きました。そのとき父は五十三歳をすでに過ぎていたように思います。そのときから父の自転車乗りの練習が始まりました。毎日ナマキズができていました。一度などは四メートルも下の田んぼに落ちて、肋骨を三本も折ってたいへんでした。そして四年目ぐらいに、さらに奥地の幡多郡津大村口屋内という所の郷里の近くの村の村医として迎えられ、四、五年して父は中村市の市民病院で亡くなりました。その間、私は高校生の一年のときに肺病になり、入院し、手術を

して二年後退院して現在は健康な毎日を送っています。

引揚日記

福岡県 中島 歌子

日僑浮善後連絡所が設置されて全日本人の管理が出来て五月一日より撫順地区の日僑遣送が開始された。死ぬか、生きるかの境地より我々に一縷の望みがもたらされたわけである。中国經濟部撫順炭鉱の技手として徴傭されていた私達の内にも、色々と帰国説が持ち上がってくるようになり、最後の残留者を残して帰国できるようになった。食事情の悪い日本に帰る我々には並々ならぬ決心が必要だった。しかしすべての日本人は終戦の日本祖国の姿を一目見て死にたいという、憂国のやみがたい情があった。私は六月十日に、行き倒れて死んでもやまない強い気持ちで帰国を申し出て徴傭解除になった。心配の幾日かが続いた。そして戴いた最後の給料は親子三人で持ち帰るには足りない額だった。帰れるその日

まで売り食いで命を得た。家の中の目ぼしい物がなくなった。大事な専門書には封印が張られてしまい手がつけられない。

日僑浮から私に引揚第三十九大隊の第一中隊長の指名があった。私は最善をつくして三百人の生命を祖国日本に送り届けることを覚悟した。すべての準備は出来上がった。今日は最後の日である。七月一日私はこの最後の家にすでに同居していた中国医、傘慶都先生を始め、兄弟と親しい友を呼んで残留者と最後の別れの会を開いた。すべての文化より遠ざかり、そしてリュック一袋の生活にはいるのだ。畳の上で、そして最後までではなななかったお布団の中でやすまれるのは今夜限りだ。家もない、着物もない、金もない、私は今夜一夜明けるとまったく乞食に一変するのだ。

敗戦、そして帰国、こんな大きな心の痛みがあるべきだろうか。三歳になる宏子には済まなく思う。しかし私はこの子を支那大陸に置きたくない。そして死なしたくない。私は日本に連れて帰りこの子の成長を見守る。

まったく親と離れて戦災児童になる子どもは気の毒な